

シンポジウム

日本の山はシカの楽園？

山、森、水が危ない？！

シカによる森林植生への影響と土砂災害

7月12日（土）

10:00 ~ 16:30

キャンパスプラザ京都 第3講義室

京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町 939
京都市営地下鉄烏丸線、近鉄京都線、JR 各線「京都
駅」より徒歩 5 分

会場参加：参加費 1000 円（学生無料）

オンライン参加（第1部のみ）：参加費不要

会場参加、オンライン参加いずれの場合も、
下記二次元コードよりお申し込みください。

会場参加は、先着 170 名となります。

オンラインを選択された方には zoom のアクセス情
報をお送りします。

申込締切：2025 年 7 月 4 日（金）

問合せ 森林再生支援センター



お申し込みは
◀こちらから
<https://x.gd/VVXI0>

《第1部：問題提起 10:05～》

横山典子（（株）野生動物保護管理事務所）

シカによる植生衰退と土壌流出の様相—滋賀県での経験を中心に

藤木大介（兵庫県立大学）

人工林風倒跡地における土砂災害発生と再造林放棄地におけるリスク上昇

石川芳治（東京農工大学）

伊吹山土砂災害の発生メカニズム検証およびシカの影響を織り込む対策への
問題提起

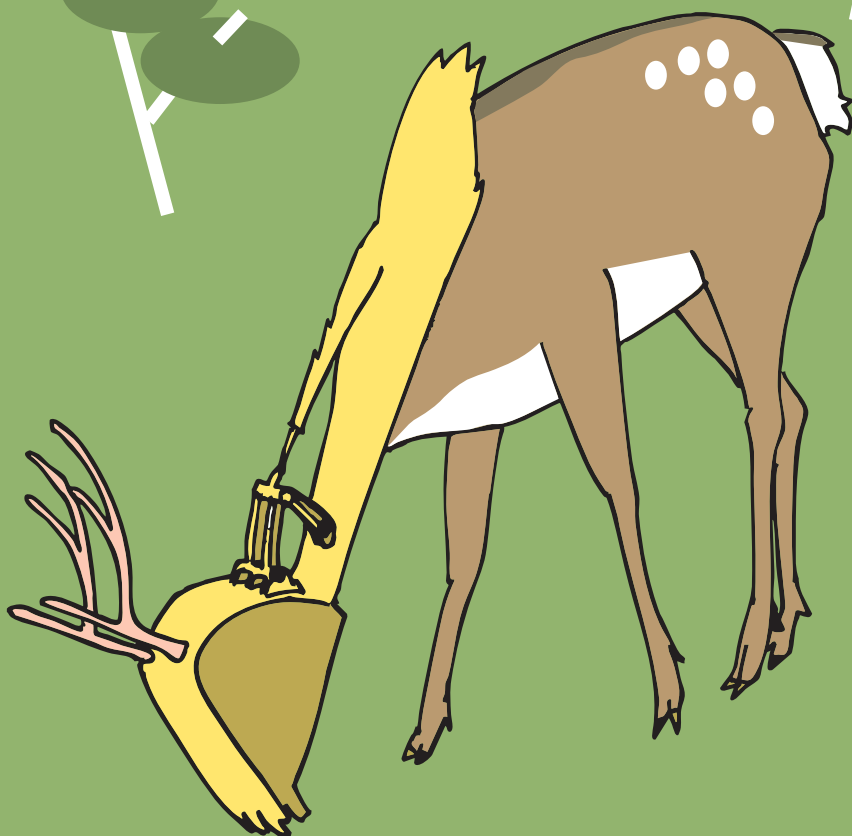
高田研一（森林再生支援センター）・山下達己（（株）シーテック）

自然配植と小土木（こどぼく）—森林再生の取り組みと現場技術の紹介

《第2部：総合討論 15:00～》

土砂災害防止のための森の管理・シカの管理について、今何ができるのかを
多分野の専門家が議論します。

キーワード：土砂災害、ゾーニング、優先順位、国・地方自治体の施策、
実現可能性など



シンポジウム 日本の山はシカの楽園？ 山、森、水が危ない？！

シカによる森林植生への影響と土砂災害

■シカが増えすぎると大きな災害を招くことがあるのをご存じですか。

森に生きるシカは増えすぎると口の届く範囲の植物を食べ尽くします。

生きた植物がなくなると落ち葉も食べます。落ち葉が食べられると地面が剥き出しになります。

そこに雨が降ると、直接地面に雨粒が当たり土が流れ始めます。そして土砂災害が発生します。

シカの数減らすため捕獲が進められていますが、ハンターも少なくなり間に合いません。

一方、土が流れるのを防ぐための新手法の森林再生や土木技法が開発されています。

■企画者は広大な自然のなかでのシカ管理に手詰まり感を抱いています。

そこに突破口を見出すべく、土砂災害を発生させないための、森の保ち方やシカ管理のあり方について、

多分野のエキスパートと交わり、一から議論したいと思います。

私たちが将来のためにやるべきことは何か、今すぐやることは何か、

少しでも前に進める「何か」が見えるシンポジウムを目指します。

第1部：問題提起（10:05～）

① 横山典子（（株）野生動物保護管理事務所・森林再生支援センター理事）
シカによる植生衰退と土壌流出の様相―滋賀県での経験を中心に
滋賀県においては、湖北地域、湖西地域、湖東地域、湖南地域の4つの地域でシカの生息状況と分布年数が異なっている。そのため、植生への影響の出方も地域によって異なり、現在進行形で植生衰退が進んでいる地域や、植生衰退が著しく土壌の流出が生じている地域など様々な影響の段階がある。これらの地域によるシカの生息状況の違いと、植生への影響の違いについて紹介し、さらに全国状況（大台ヶ原・大杉谷、但馬地域、丹沢山地など）についても紹介する。また、シカの個体数管理における課題（手詰まり感）を整理する。

② 藤木大介（兵庫県立大学）

人工林風倒跡地における土砂災害発生と再造林放棄地におけるリスク上昇
兵庫県立大学の人工林風倒跡地で土砂災害が発生した状況を報告する。平成2004年の台風23号で由良川と円山川が氾濫した際、県内で約3,000haの人工林が風倒被害にあった。その後、2009年に佐用豪雨が発生。豪雨により多くの風倒跡地で土砂災害が発生した。また、県内では収穫期を迎えた人工林の伐採後に再造林がなされないケースも増えてきており、このような再造林放棄地では、シカの食害により森林が再生しない状況が生じている。特に先駆性樹種がシカによる採食に弱く、低いシカ密度でも森林が再生しない状況になっている。こうした状況が土砂災害のリスクを引き上げている。

③ 石川芳治（東京農工大学）

伊吹山土砂災害の発生メカニズム検証およびシカの影響を織り込む対策への問題提起

シカの影響下において発生した2024年7月1日の伊吹山の土砂災害の発生事例についてその発生メカニズムを、砂防学の視点から報告する。また、20年以上も前からシカの高密度化による林床植生衰退により土壌侵食が発生している丹沢山地において全国に先駆けて神奈川県自然環境保全センターが作成した「丹沢大山自然再生土壌保全対策マニュアル」について、作成の経緯などを紹介し、シカの影響と土砂災害について問題提起を行う。

④ 高田研一（森林再生支援センター常務理事）・山下達己（株式会社シーテック 環境・技術開発部リーダー）

自然配植と小土木（こどぼく）―森林再生の取り組みと現場技術の紹介

【自然配植とは】われわれが提案する森林再生方法論である自然配植が目指す群落は、生物がより多く棲める多様性の高い樹林である。自然配植では、異齢林と呼ばれるさまざまなサイズの樹木が共存できる複相性、モザイク性の高い群落を美しく配置することが基本である。全面を一様にすばやく樹林化させるのではなく、百年後の森の姿をイメージし、実現することを根本としている。

【KODOBOKU（小土木）とは】KODOBOKU（小土木）は、送電鉄塔の保守から生まれた技術（商標）で、株式会社シーテックにより開発された。森林内にある送電鉄塔の保守では、重機が不要で、軽量の資材で、高耐久性である技術が求められ、ストーンバッグ、鋼製しながら、ステンレス土嚢、などの独自開発した資材を利用し、地表面を流れる水を可視化（シミュレーション）する技術によって脆弱箇所を見つけ小規模な対策で送電鉄塔の敷地保護を行ってきた。現在は、森林保全への取り組みにも活用されるようになってきた。さらに、現地素材を活用した環境負荷の小さい治山技術により、最適な敷地保全を実現させたことが森林環境保全と脱炭素社会の実現に大きく貢献するものと高く評価され、2024 愛知環境賞において「金賞」を受賞した。KODOBOKU（小土木）技術により、多様な生き物が集い、災害に強い森づくりへの取り組みを紹介する。

第2部：総合討論（15:00～）

話題：土砂災害、ゾーニング、優先順位、国・地方自治体の施策、実現可能性

登壇者：

藤木大介（兵庫県立大：シカの植生への影響）

田村 淳（神奈川県：シカの植生への影響）

石川芳治（東京農工大学名誉教授：砂防工学）

五味高志（名古屋大学：流域水文学）

蔵治 光一郎（東京大学：森林流域社会環境学）

濱崎伸一郎（（株）WMO：シカ管理）

山下達己（（株）シーテック：KODOBOKU）

高田研一（森林再生支援センター）

横山典子（森林再生支援センター・（株）WMO）

鹿取悦子（森林再生支援センター・芦生タカラの森）

松井淳（森林再生支援センター）：座長・ファシリテーター

下村泰史（森林再生支援センター・京都芸術大学）：ファシリテーター